

Gratitude.

瑠冠

目次

1. 目次
2. まえがき
3. 反比例するかのよう
4. そこに存在するのは くゆる煙だけ
5. 何のために自分は
6. その心に蘇るのはいつもあの声
7. 君の瞳はいつだって綺麗すぎるから
8. その声だけを頼りに僕は
9. 恍惚の涙は
10. that was why.
11. 時計針
12. 射抜いてくれよ
13. When?
14. どうせ泣くのなら
15. 鮮明すぎて怖いぐらいだと言え
16. 恐れる故の思いもあるけど
17. 泣かない事が本物の慟哭
18. 頬を濡らしながら
19. この翼をむしりとられたあの日から
20. Interruption
21. A glaringly vivid shock.
22. 奥付

まえがき

一段落ついたから出来た一冊。

と言えはいいのだろうか。

色々な思いから

紡いできた詩作ではあるのだが、

一旦日を置かないと公開する気にならない、

そんな作品がたまにできたりする。

まだ何も一段落などついていないはずなのに

この作品群としては機を熟した、と判断したという意味で

そろそろ詩集にすべきときが来たと思った。

たとえば一つのコップがあるとして

その中に収まることを許さないように

ペットボトルから水を注ぎ続けるのがこの作品群だとするなら。

少しでもその心の乾きが潤えばいいと切に祈る。

2014年2月 瑠冠

『反比例するかのように』

記憶の中の君は
いつも笑顔だから

反比例するかのように
涙もろくなる俺を
そうして見つめてくれてるんだろ？

温かすぎて辛い事もあるっていうのに
まるでそんな事はお構いなしだ

もう手で触れて抵抗する事も出来ない俺を
まだそうやってからかっている

早く一緒に笑えたらとも思うけど
まだ笑いながらも涙こぼれそうだ

行かないでくれよ

その一言が
今も喉の奥で詰まったまま
身動きとれずにいるんだ

足がすくむ理由も
足を進めるワケも
君の存在だと言ったら
首をかしげてくれるかい

あの仕草にもう一度触れたい
出会いたい

『そこに存在するのはくゆる煙だけ』

壁に全ての体重をあずけたまま
そこに存在するのは くゆる煙だけ
この時間を止めるためなら
何をしたっていい
それほどに心は恐怖していた
時が経つ事それ自体に

言いたい事ばかりを言うんだ 奴らは
この痛みも知らずに
反発心を認めながらも
諦める事だけがうまくなってしまったな、俺たち

何もかも止まれば
何も考えなくていい
叶う事がないから言える事もある

難しい事並べるばかりしかできない俺を
またそうやって軽々しく責める
慣れているはずなのに
なぜだろう 涙流れる

逃げに逃げても逃げきれない
立ち向かうたびに
振り向くたびに
新しい傷が増えていくだろ？

安心なんて贅沢は言わない
俺たちが望むものは
ただの静謐と小銭
たったこれだけの難しさが身に染みる
だからこそ肩叩きあっていこうぜ

『何のために自分は』

人の人生を変えるのは
やはり人の人生で
君を失ったあの日
僕は自らの人生の意味を考えた

何のために自分は
ここに存在しているのか
考えずにはいられなかった
考えなければ
君のためにもと
そう思っていた

だけどそれは自分のためだった

僕はあの日
君の人生ごと
君の夢を背負ったんだ

意味を作り出すために
僕の夢を叶える事が
夢をもっていた君の思いを遂げる事だと
直感で知っていた

分かっていたんだ
最初から

だから僕は全ての”普通”を捨て
荒波に飛び込んだ
生き抜かねばならぬ運命だけを抱いて
涙は静かに水に溶けていった

一度終わったはずの人生
怖いものなんてない
未来を真っすぐ見つめる君の瞳を
僕が受け継ぐ

自分なんてどうでもいい
自分が夢を見続ける事が辛くなっても

君はいつまで経っても
夢から目を逸らさないから
その横顔を心に住まわす僕には
選択肢など与えられていない

『その心に蘇るのはいつもあの声』

その心に蘇るのはいつもあの声

くじけそうになった時
決まって響いてくるんだ
心が折れそうになったことも
数え切れないほどになったけど
思い返せば一人じゃなかった

目には見えないけれど
いつも一緒にいてくれる
これは実感だから
命で感じ取るしかない事だけれど
僕は今 思い切る事ができるんだ
僕は君にもう一度会う事ができたと

早くにいなくなってしまった君に
僕の人生を変えた君に
もう一度会えたと
実感で言い切る事ができるから
君の存在を絶対に忘れない
今までも これからも

君を無意味になんて僕がさせないと
僕が君が亡くなった事に意味を作ると
そう決めた日から幾年
ここまで来たよと呼びかけた
そっと

『君の瞳はいつだって綺麗すぎるから』

君の瞳はいつだって綺麗すぎるから
恐怖さえ覚えてしまうんだよ
僕が知っている僕以上のものまで
取り出されていく気がしてさ

心もそぞろだ

だけどその眼差しに向かうのをやめられない
弱さを見せる本当の自分を
見つけ出して欲しいと思うからかな
もう自分じゃ見つけられそうにないから
代わりに探しだしておくれ

震える瞳で
真っすぐで複雑な君は
全て見え過ぎて苦しい事もあるだろうね
その尽きぬ悲しみは
僕も同じものを持っている

それこそが強さだと
言い切れる心と涙を持っている僕らは
同じものを使って
生き永らえていくんだよね

『その声だけを頼りに僕は』

君の声がしたんだ

君がいるであろう方向から

もう見えはしないけれど

間違いなんかじゃない

絶対に

その声だけを頼りに僕は

終幕の一刻を繋ぎ止めてた

何が見えなくなっても

見えた頃よりも全てが見えた

君の姿はその声を聴くだけで

心の中に鮮やかに描かれていた

かすかな震えも全て感じてた

僕の全身で君の存在を感じていた

遠ざかるんじゃなく

いつも側にいる

君が求める時にはいつでも

気まぐれなのはいつだって変わらないから

それは 飛び立った後も一緒さ

たった一つだけ伝えられるなら

君に出会えて

本当に幸せだった

『恍惚の涙は』

全てを壊そうとするのは
その心が音を立てて
崩れ始めたからなのでしょう？

間違ったものの末路は
こうも憐れで儚い

倒される事をいつも待っているように
悲しい目が見え隠れしている
この手を止めてくれ、と
心で常に慟哭する様は
誰一人知る事なく
たった一人で散ってゆくのだろう

恍惚の涙は
この世全ての憂いを集めたかのような光をもって
水面に落ちる

「行かないでくれ」とあの日言えなかった言葉が
初めて声になる瞬間
その心によぎるものは何なのか

走馬灯が煌めく
その身だけが知る
今際の刹那

星が綺麗だ、と
その思いだけを残したまま
今いた場所には羽根だけが残った
亡骸さえ居場所を失い
心が向かう先は
その腕（かいな）だけ

that was why.

傷つけられたのが君だったから
許せなかった
もし自分が同じ目に遭ったなら
どんな事をしてでも耐えられた
でも君の瞼が閉じてしまったから
僕はあの時心に決めたんだ
鬼になると

もう既に触れられる対象もなく
魂だけとなってしまった君だけど
その全てを守り抜きたい
だから僕は一度人生を捨てたのかもしれない
一人だけ幸せになんてなれなかったんだよ
たとえ人がそれを弱さと名付けても
あの光景を見ていないからそんな事が言えるんだ

未だ肌に焼けついて離れない光景は
思い出す事も憚るような悲しみで満ちている
忘れるものか
あの日は僕そのものだということに

時計針

時計針の音がやけに耳に障る夜
目を開けて眠れずにいても
広がる景色は心の中のものだけだった

時に楽しげな思い出ばかり切り取り
時に悲しく苦い思い出ばかりを蘇らせては
指先で弄んでいる

蘇るんだよ、今でも
白黒にさえならず

手を伸ばせば届きそうな距離に気付けば
過去はいつもそこにいて手招きをする

ぐっところえる足元
耐える痛みは経験したものじゃないと分からないだろう
近づきたいから遠ざかった
想っているから触れられなかった
痛みがまだ蘇るから泣かなかった
その気持ちが少しでも分かるのなら
相当きつかったろうね今まで
人が上を向けるのも
下を向いてしまう事くらいに
突然やってくるものだから
焦らずじっくり待つ事が必要な時もある
そうも言ってもらえないだろうけどね

『射抜いてくれよ』

突き刺さるような満ちた眼差し
しかしその瞳の奥でいつも見え隠れしているものは
野望に隠れた悲しさと孤独

暗い目の持ち主はいつもそう
心に鍵をかけている
触れられる事が怖いから
その鍵穴を抹消する事さえあるね
光に一步踏み込んでしまえば
この身ごと消えてしまいそうな感覚に駆られている

弱い犬ほどよく吠える、と何度自分に向けて囁いた？
見せかけでもいい
そんな望み方しかできない
ねじきれそうなこの心を
その眼差しで
射抜いてくれよ
赤い閃光の如くに

when?

痛みが零れ落ちる音がした
君の耳にもし届いていたら――
そう考えるほどに狂おしくさえなる
君に心配をかけない
それだけが全てだった
笑うだろうけどね

果てても笑ってた
刺さっても微笑んでいた
弱り果てても強がり
壊れても壊れてなどいないと言い切った
僕が止まるのは、いつなの？

きっと止まる事など許されないのだろう
今更それを悲しいだなんて名付ける気もない
それを僕は使命として受け止めたんだ
何を得ても何かを引き換えにするのなら
引き換えにすれば何かを得られる事も決まっているのだろう

得るばかりじゃないさ
ただ、失うばかりじゃない
決して

『どうせ泣くのなら』

手の甲に涙こぼれおちる
悲しい涙じゃない
嬉し涙さ
どんな痛みも吹っ飛んでしまうような瞬間に出会ったんだ
これはまるで君を想っている時のような温もり
心に向けて広がっていくよ
陽光の如くに

眼差しからも思わず優しさが溢れだす
いいかい？その頬が涙に濡れた回数だけ
君は微笑む事ができるんだ
自分をそれでも責めてしまうのなら
そうして自身を責め続ける君が
愛おしくて仕方がない
もう止められない

どうせ泣くのなら君のために泣きたい
どうせ笑うのなら君のために笑ってたい
全部自分のために向けるのは飽きてしまったんだよ
満たされない思いはこうして満たされていく
いつだって一人のために生きてたい

『鮮明すぎて怖いくらいだと言えば』

言わせてくれ 今だけは
君のあの日の眼差しが
なぜこんなにも焼きついて離れない？
全てに裏切られたあの日
何を思ったのかも忘れてと言ったが
あれは嘘だ
君を守るための

鮮明すぎて怖いくらいだと言えば
傷つけることになると
そう思ったから

あの日の空気の味を
今でも忘れない
最大の侮辱を味わうかのようなあの空気を
忘れられるはずもない

僕が傷つくのは我慢できた だけど
君が傷めつけられて なお
傷めつけられた現実を見せ付けられた瞬間
壊れてしまったんだよ 僕は

あの日から僕は見失った事などなかった
片時も

『恐れる故の思いもあるけど』

怖がっているままじゃ何も生まれない
怯えた心を直視しながらも
一步踏み出す事に意味がある

最初から完全だなんてあり得ない
求めたものそのままが
すぐに手に入るはずもない
積み上げていったその先に
本当に欲しいものがあるはずだ
それは時に自分の想像をも超えていくような
そんな輝きを放つ事もしばしばで
失う事が怖くて仕方がないものをもっている事以上に
幸福な事はない

恐れる故の思いもあるけど
だからこそ生きていけるといえるものだ
くすぐったい痛みは
大切にしてもいいような
そんな気になってくるものなのさ

『泣かない事が本物の慟哭』

触れる事が辛い過去
それなのになぜだろう
最近少し触れてみたいと思うようになったんだ
治りかけた傷を掘り起こしてしまえば
すぐに傷ついた直後のようになってしまうから
近づけなかったはずなのに

滲む傷跡があるからこそ
出来る事があると
気付く事ができたからなのかもしれない
初めて話してみてもいいと思えた
あからさまでもなく
隠すでもなく淡々と

一生胸の奥にしまいこんでしまった所で
何も残らないような気がして
その魂から溢れる涙を僕は知っている
だからこそ涙する理由も
涙しない事の大切さも知っていて
前進する時には涙を見せない 決して
涙を見せるのは限られた人にだけ
後はすべて強気でいること
それが君が真に心から泣く事で
泣かない事が本物の慟哭

『頬を濡らしながら』

見上げてみた所で
涙が止まる事はなかった
しかし それでもいい
泣いたままでも顔を上げて
進んでいく事に意味はある
頬を濡らしながら
そう心を叱咤した

自分の言葉しか届かなくなった時には
その声に耳を傾ければいい
悲鳴を上げてまで
自らを押し殺す必要はない

それでも そうせざるを得ない場面は存在している
その時はどうか
自らを出せない自分を責めないで
正しいと思う事は
後からいくらでも打ち立てていけるものだから
焦ることなく 目的は何か 何のためなのか
それだけを見失わなければ
万事大丈夫だ

『この翼をむしりとられたあの日から』

この翼をむしりとられたあの日から
どれぐらいの年月が流れたらろうか
まだ感触を忘れられずにいる僕を
現在が指を指して笑っている事だけが
唯一の救いだ

もうとっくに忘れたと
何度言っても消えない
忘れたなんて嘘
一秒前の出来事のように
鮮烈に刻まれているよ
自分でも笑ってしまうくらいに

すぐに始まり
すぐに終わるはずの一生は
ちっとも終わらない
君はいないというのに

それでも生き抜きたいと
心の底から叫ぶ事ができるのも
やっぱり君がいたからで
あなたがいたからで
涙を流したところで
君に何かを捧げたことにはならないから
君に差しだせるようなもの 手に入れるまで
僕は走るよ

Interruption

目の前の一瞬を精一杯生きてきた
ただそれだけの事が 当たり前過ぎて
どうやら一番困難な事として
挙げられているみたい

はっきり言えば 生きてるんだよ 今を
それなら過去を生きようが
未来を生きようが
現在を生きている事に変わりはないはずで

涙の理由も何もかも
無知のものに
とやかに言われる筋合いはない

優しいから その横槍も受け止める
それは素晴らしい事だけど
自分に優しくするために
受け止めなくてもいい事だってあるんだよ
君が一番よく知っているようにね

その心が欲しがっているものは何？
心に時々聞いてあげるんだよ
そうやって 軌道修正しながら
本当に欲しいものは何か考えるんだ
どこまでいっても主役は君だから
濁った世界に住んでいると
忘れやすくなるその事実を
時々思い出してみて

A glaringly vivid shock.

足跡をつけたそばから
消されていくような喪失感
本当に大切なものは
他にあるんじゃないかって
問いかける声を聞かないフリで誤魔化す事も
もう 無理のようだ

抑えきれない
誰かのために生きていたいという想い
傷つく事さえ恐れなくなるほどの
鮮烈な衝撃はある日 訪れ
いつか出会う君のために生きることを誓った
それだけが望みだった

強く思う気持ちは
たとえ届かないように見えても
ちゃんと届いている
何も変わらないように見えても
その心には ちゃんと輝きが積み重なっている
そう確信できた時
空虚な気持ちは露と消え去る

詩集『Gratitude.』

<http://p.booklog.jp/book/82203>

著者: 瑠冠 (るか)

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ruka001/profile>

著者ブログ : <http://ameblo.jp/ruka-philosophia/>

HP : <http://rukanouta.hannari.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/82203>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82203>

公開日 : 2014.3.1

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ